

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月4日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22330140

研究課題名（和文） 財務会計における基礎理論の国際比較

研究課題名（英文） International Comparison of basic theory in Financial Accounting

研究代表者

辻山 栄子（TSUJIYAMA EIKO）

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：50114020

研究成果の概要（和文）：本研究では、財務会計における基礎理論の国際比較を行うとともに、現在世界的な規模で再検討が進められている財務会計における概念フレームワークならびにIFRSsについて、アカデミックな視点から検討を加えた。そして、欧米の会計理論に対して日本の会計理論が孤立しているという見解は当を得ていないことを明らかにした。3年間の研究を通じて得た成果は、web上に設置した研究拠点「早稲田会計研究センター（<http://w-arc.jp/>）」を通じて、日本語と英語で随時世界に発信した。また、研究報告書として「IFRSsの理論的分析」をまとめた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a comparative analysis of basic theories in Financial Accounting prevailing in the world. We also examined the current worldwide discussion on Conceptual Framework of Financial Accounting and IFRSs, from an academic view point. As a result of this study, we clarified that the views, basic accounting theory in Japan is isolated in the world, are not substantiated. We uploaded our results that had been obtained during past 3 years in the ‘Waseda Accounting Research Center (W-ARC)’ web-cite (i. e. <http://w-arc.jp/>).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2011年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2012年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
年度			
総計	10,000,000	3,000,000	13,000,000

研究分野：財務会計

科研費の分科・細目：会計学

キーワード：財務会計の基礎理論、概念フレームワーク、資産負債アプローチ、収益費用アプローチ、会計基準のコンバージェンス、収益認識、リース会計、保険会計

1. 研究開始当初の背景

2001年の国際会計基準審議会（IASB）発足以来、自国基準と国際会計基準/国際財務報告基準（IFRSs）との差異の縮小（コンバージェンス）に積極的に取り組んできた日本と

米国において、2008年後半にはIFRSsそのものの自国基準化（アダプション＝強制適用）論が急浮上していた。本研究課題申請時の2009年は、いわばそのブームのさなかにあった。周知のように、IASBが将来的に採用しよ

うとしている会計モデルは、大恐慌以降の会計制度の基礎にあったいわゆる損益法的な会計思考とは本質的に異なるものである。注目すべきは、その是非をめぐる議論において、欧米の会計理論に対する日本の会計理論の孤立、あるいは欧米の会計理論の変化に対する日本の会計理論の対応の遅れを指摘する声があったことである。つまり、欧米の研究者は IASB の思考の基底にある会計モデルを支持しているのに対し、それに異を唱える日本の研究者は世界の中で孤立を深めているという指摘である。

本研究の動機は、欧米の会計研究者とも密接に連携をとりながら、その指摘の真偽を正すことにあった。そのことを通じて、今後の日本の会計基準のあり方にアカデミックな視点から貢献することができると考えたからである。

2. 研究の目的

(1) 問題の所在

IASB と米国財務会計基準審議会 (FASB) が共同で改定作業を進めている会計基準は、いわゆる近代会計を支えてきた損益法的な会計思考とは本質的に異なる会計モデルに依拠しているとされている。日本の会計研究者の中には、このような会計基準の改定の動き、そしてその基底にある会計モデルの急激な変容について懸念を抱く者が少なくない。より具体的には、金融商品に限定されない資産負債の全面時価評価論、あるいは資産負債の時価評価差額のすべてをその発生期の業績ととらえるノンリサイクル型の包括利益主義の論調に対する懸念である。

一方、近年のアメリカ会計学会においては、実証研究が主流を占め、会計モデルに関する議論が正面から取り上げられることは稀になっている。そして、ともすれば貸借対照表指向、公正価値指向の会計が主流を占めるともいわれている。事実、2004 年から世界的な規模で再検討が進められている財務会計における概念フレームワークにおいては、少なくとも財務報告の目的と質的特性に関する限り、将来の基準改訂における貸借対照表指向、公正価値指向を後押しする準備が着々と進められているように思われる。そのため、上述のような見解をとる日本の会計研究者に対して、しばしば世界的な孤立論ないしは会計環境の変化に対する対応の遅れを指摘する報道が散見される。

しかし実際には、G. J. Benston et al. (2007), AAA's Financial Accounting Standards Committee (FASC), The FASB's Conceptual Framework for Financial Reporting: A Critical Analysis, *Accounting Horizons*, 21(2); 229-238 等に代表されるように、FASB や IASB の貸借対照

表指向を痛烈に批判する見解は、欧米の研究者の中にも少なくない。したがって、日本における財務会計の基本思考は世界的に孤立しているという一部の報道は、日本における会計基準の方向性を意図的に貸借対照表指向、公正価値指向に誘導しようとしている可能性がある。だとすれば、この点に関する真偽をアカデミックな視点から正しておくことには意義があるだろう。

(2) 本研究の課題

これまで、「会計基準」の国際比較は数多く行われてきたが、各国の会計基準が依拠している概念フレームワークを支える「財務会計の基礎理論」ないしは各国の会計研究者の多数が支持している「会計モデル」に関する国際比較はほとんど行われてこなかった。そのことが、先のような指摘に繋がる一因にもなっている。

そのため本研究では、まず現代の財務会計における代表的な会計思考およびそれに基づく会計モデルを明確にしたうえで、欧米の会計研究者の中でそれらがどのような支持を得ているのかを検討することを第 1 の課題とした。加えて、2001 年以降の IFRSs 改訂作業において IASB が当初目指していた貸借対照表指向と公正価値指向がどのように貫かれているのか、あるいは変容しているのかを分析することを第 2 の課題とした。

3. 研究の方法

(1) 早稲田会計研究センター(W-ARC)の設置

本研究初年度である 2010 年度に、米国のコロンビア大学に拠点がおかれている CEASA に倣った web 上の研究拠点「早稲田会計研究センター (Waseda Accounting Research Center)」(<http://w-arc.jp/>) を立ち上げた。この web-cite 上に、以下に示す(2)と(3)の方法で得た成果(コンテンツ)を随時アップロードして情報発信し、世界の会計研究者との情報交流に役立てた。

(2) 国際シンポジウムの開催

上記研究拠点(早稲田会計研究センター)主催で 300 名近い参加者による国際シンポジウムを 2 回開催し、世界の著名な会計研究者の考え方が公正価値会計に極めて批判的であることを確認した。そして、その記録の日本語版を後掲[雑誌論文]⑨と⑩にまとめるとともに、英語版を <http://w-arc.jp/> に掲載して、世界的に意見発信した。

①2011 年 2 月 3 日「IFRS アドプションの展望——US、カナダ、そして世界の実情」(講演者 Prof. Shyam Sunder—Yale 大学、Prof. Karim Jamal—カナダ Alberta 大学)

②2012 年 2 月 9 日:「IFRS のいま——IFRS を取り巻く現代的課題」(講演者 Dr. Yuri

Biondi—フランス国立科学研究センター主任研究員、Prof. Tomo Suzuki—英オックスフォード大学教授)

(3) ワークショップ、セミナー等の開催

上記の研究拠点主催で、以下のようなセミナー等を開催した。このうち②については、論文(日英)を Occasional Paper として <http://w-arc.jp/> に掲載した。また⑦についても、その成果の一部(日英)を Occasional Paper として <http://w-arc.jp/> に掲載した。

- ①2010年10月31日「日本の財務会計研究の棚卸し」(日本会計研究学会特別課題委員会)
- ②2010年11月20日「戦後日本の会計基準改革—外的要因と内的論理—」(斎藤静樹・明治学院大学教授)
- ③2011年1月20日 “The Evolution of the IASC into the IASB, and the Challenges it Faces” (Stephen A. Zeff・米ライス大学教授)
- ④2011年2月2日 “The Distinctive Features of the Alberta JDM Approach to Research” (Karim Jamal・カナダ・アルバータ大学教授)
- ⑤2012年2月2日 “The Pure Logic of Accounting: A Critique of the Fair Value Revolution” (Dr. Yuri Biondi—フランス国立科学研究センター主任研究員)
- ⑥2012年11月14日 “Financial accounting and the formation of share market prices: A theoretical analysis through experiment and simulation “ (Dr. Yuri Biondi—フランス国立科学研究センター主任研究員)
- ⑦2013年1月～3月、研究代表者、研究分担者、研究協力者を中心に、ワークショップ「IFRSsの理論的分析」を5回開催し、その成果を報告書(後掲[図書]①)にまとめた。

(4) 海外研究者との研究交流

本研究課題の所期の目的を達成するため、研究代表者はアメリカ会計学会(AAA)の財務会計基準委員会(FASC: Financial Accounting Standards Committee)のメンバーになって海外の研究者との研究交流を積極的に進めた。その結果、海外の研究者の多くが公正価値会計に対しては懐疑的な見解に立っていることを確認した。その成果が後掲の[学会発表]①と③および[雑誌論文]②～⑦である。

(5) 先行研究に関するデータベースの構築

現在のIASBとFASBの間のMoUプロジェクトの中でも世界的に最も激しい論争的になっている収益認識、保険契約、リースにつ

いて、内外の網羅的な文献データベースを構築し、研究代表者と研究協力者、そして共同論文執筆者で共有した。

4. 研究成果

以上のような研究活動を通じて、欧米の研究者はIASBの思考の基底にある新しい会計モデルを支持しているのに対し、それに異を唱える日本の研究者は世界の中で孤立を深めているという指摘は根拠のないものであることを多面的に再確認することができた。その具体的な研究成果は、後掲の雑誌論文等において明らかにされている。

以下では、本研究の分析視角として抽出した現代会計における2つの会計思考、そして近年のIFRSs改訂作業におけるこの両者のせめぎ合いを観察することによって明らかになった、伝統的な会計思考の必然性について要約する。

(1) 現代会計における2つの会計思考

IFRSsが、各国基準と共通の会計思考に依拠していたとしたら、2001年のIASBの発足以来続いている会計基準の国際的なコンバージェンス、ないしIFRSsのアダプションがここまで難航することはなかった筈である。各国における制度的な差異がIFRSsの受け入れを難しくしていることは否めないが、それだけではIFRSsそのものの改訂作業がこれほど難航している理由としては不十分である。近年の財務会計、とりわけ会計基準の国際的なコンバージェンスの問題を複雑にしている主たる原因は、IASBが依拠しようとしている会計の基本思考が各国会計基準の中に長い間浸透してきた伝統的な会計思考と大きく乖離していることにあることは、「2. 研究の目的」において指摘した通りである。

IASBが新たな会計思考によって世界の会計基準を書き換えようとしているのであれば、少なくとも2つの前提が必要になるはずである。第1に、その新しい会計思考は、伝統的な会計思考にとって代わる「会計革命」を起こすに値するほどの理論的な必然性を備えていること、そして第2に、IASBがその新しい会計思考によって世界の会計実務をトップダウン式に変更することについて世界的なコンセンサスがあること、である。

ただしこのうちの第1の前提が担保されている限り、第2の前提は時間の経過とともに整ってくる可能性がある。しかし、もし第2の問題に疑義があるとすれば、話は別である。そしてそれが単なる杞憂でないことは、2001年から始まったIASBによる基準改訂作業が常識では考えられないほどの長い年月を要していること、また当初提案がことごとくそのままでは受け入れられていないことを見れば自ずと明らかであるといえる。

本研究ではこの問題を検討するにあたって、まず図表1のような現代の財務会計における対立軸を抽出し、IASBが依拠しようとしてきた会計思考の全体像を伝統的な会計思考と対比させて明らかにした。図表1の1行目から8行目までは、もっぱら会計の認識・測定構造にかかわる見解であり、9行目と10行目は、それらを支える前提にかかわる見解である。IASBの指向する会計思考ないし会計モデルを論じる際には、しばしば図表1の3行目に示した資産負債観（資産負債アプローチ）と収益費用観（収益費用アプローチ）のようないわゆる利益計算をめぐるアプローチや、6行目にある取得原価主義と時価主義のような資産評価基準をめぐる原則の対立が主たる争点としてクローズアップされることがある。しかし、図表1の各行の見解は各々独立の対立軸というわけではなく、会計の認識・測定構造に全体として有機的に結び付いている。例えばPaton and Littleton (1940)「会社会計基準序説 (An Introduction to Corporate Accounting Standards)」AAA流の伝統的な会計モデルにおいては、概ね図表1の対立軸の左側の列の視点 (view) が貫かれているが、右側の視点も一部でその補完的な役割を果たしている。一方、IASBの提案の基底に横たわる基本思考は資産負債アプローチに立脚しているとされ、基本的には図表1の右側の列の視点が貫かれているようにもみえるが、少なくとも現段階では、左側の観点が随所で補完的な役割を果たしている。

図表1 現代会計における主たる対立軸

	視 点	対 立 軸	
1	焦点を当てる資源	フロー	ストック
2	測定のアンカー	現金収支	公正価値 (時価)
3	利益観	収益費用観	資産負債観
4	同上	損益法	財産法
5	貸借対照表観	動態論	静態論
6	資産評価基準	取得原価主義	公正価値 (時価) 主義
7	損益認識基準	実現基準	公正価値 (時価) 基準
8	業績指標	当期純利益	包括利益
9	企業に関する前提	継続企業	清算企業
10	株主資本価値	正味将来フローの現在価値 (のれんを含む)	純資産時価 (のれんを除く)

したがって、そのどちらの立場を支持するにせよ、現代会計における2つの会計思考を検討する際には、その支持の根拠ともいべきより上位の基本思考に焦点をあてて検討する必要がある。しかしこのうち伝統的な発生主義会計の構造については、これまでも多くの文献において論じ尽くされているが、近年のいわゆる公正価値会計の会計思考の全体像については、必ずしも正確な理解が共有されているとはいえない。そこで後掲[雑

誌論文]⑥では、伝統的な会計思考とは真っ向から対立する会計思考に立脚してIFRSsの変革を唱え、かつ強力な影響力を行使しているCFA協会(CFA Institute)の「包括的ビジネス報告モデル：投資家のための財務報告 (A Comprehensive Business Reporting Model: Financial Reporting for Investors)」(2007)を取り上げて、彼らの提案モデルを分析した。現在のIASBの概念フレームワーク・プロジェクトや個別基準の改訂作業においては複雑な力関係と関係各界から寄せられるコメントを反映して次第に当初の提案とその背後にある意図が見えにくくなっているのに対し、CFAI(2007)では、極めて単純明快に全面時価会計に基づく新しい報告モデルが示されている。また概念フレームワークや個別基準の改訂の際にIASBから公表される最初の提案は、いずれもこのモデルに酷似し、その後の長い論争の原因になっている。したがって、IASBが指向している会モデルの全貌を理解するためには、CFAI(2007)を分析することが役に立つはずである。

分析の結果、この提案モデルの最大の特徴は、金融商品ばかりでなくその他の資産と負債を全面的に公正価値評価するとともに、その期間差額を即時損益認識することにあること、そしてそのような主張の根底にあるのは、現代の世界経済においては金融セクター(financial sector)が主役であるという固い信念であることを明らかにした。そこには、ゴーイング・コンサーンとしての事業の遂行主体として満期までの資金を管理する経営者、ならびにその経営者の視点に寄り添った長期投資の株主の視点ではなく、企業の外部から、社債権者との短期的な利害関係に着目する投資者としての株主、つまり企業のアウトサイダーの立場から株式投資を考える株主の視点が色濃く投影されている。負債の公正価値評価差額を即時に利益算入することも、このような視点から正当化されている。

一方、伝統的な会計モデルにおいては、すでに生じている資産価値ないしはその増分の測定可能性ではなく、企業の外部との取引を通じて広い意味でのキャッシュが回収されているか否かに着目する、つまり投資原価を回収した余剰(利益)の計算を何よりも重視する、事業投資の主体である企業経営者の視点が色濃く投影されている。

問題は、この2つの会計思考は、それぞれ想定されている情報の用途(社会的要請)に応えることができているのか、そしてもし現代の経済社会のもとでこの2つの会計思考のうち1つを選ぶ必要があるとしたら、どちらに優位性があるのかということである。

(2) 伝統的会計思考(モデル)の必然性
その点に関する本研究における検討結果

を結論的にいうと、伝統的な会計モデルは、投資意思決定においても、また仮に現代の経済活動の主役が金融セクターあったとしても、いわゆる公正価値会計に対してより有用な情報を提供しようということである。

この点については、後継[雑誌論文]の多く(例えば①⑤⑥)において明らかにしているが、特に本研究の報告書「IFRSsの理論的分析」(後掲[図書]①)においては、2001年のIASB発足以来、激しい論争が続いている収益認識、リース会計、保険会計をはじめとして、企業結合、金融商品、株式報酬等の個別基準プロジェクト、そして概念フレームワーク・プロジェクトのいずれにおいても、会計研究者のみならず市場関係者からの激しい反発に遭って、IASBが当初目指していた貸借対照表指向と公正価値指向は変容を余儀なくされ、次第に伝統的な会計モデルに回帰しつつあること、つまり伝統的会計モデルには社会経済的な必然性があることを確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 30 件)

- ① 辻山栄子、財務会計のアポリア——対立する2つのパラダイム、早稲田商学、査読無、第434号、2013、163-194
- ② 米山正樹、会計理論の質、会計、査読無、第183巻第3号、2013、16-29
- ③ 奥村雅史、わが国における利益訂正の実態について、会計、査読無、第183巻第3号、2013、74-86
- ④ 奥村雅史、利益訂正の情報移転—伝播効果 vs. 競争効果—、早稲田商学、査読無、第434号、2013、57-70
- ⑤ 辻山栄子、財務会計における認識と測定—フローとストックの規定関係、会計基準研究の原点(斎藤静樹先生古稀記念論文集編集委員会編)、査読無、2012、121-140
- ⑥ 辻山栄子、包括的ビジネス報告モデルの批判的検討、早稲田商学、査読無、第431号、2012、243-268
- ⑦ 米山正樹、過去の業績に向けるべき眼差し、財務会計研究の回顧と展望(徳賀芳弘・大日方隆編著)、査読無、2012、413-445
- ⑧ 米山正樹、理論研究のゆくえ、会計基準研究の原点(斎藤静樹先生古稀記念論文集編集委員会編) 査読無、2012、315-339
- ⑨ 早稲田会計研究センター(代表辻山栄子)、国際シンポジウム: IFRSのいま—IFRSを取り巻く現代的課題、季刊・企業と法創造、査読無、第9巻第1号(通巻第33号)、2012、57-92
- ⑩ 奥村雅史、利益の履歴情報と市場の反応—利益訂正による分析—、産研シリーズ・報

告利益の管理と株式市場の反応、査読無、第47号、2012、33-47

- ⑪ 山下奨、投資の性質に着目した資産負債評価の再整理、跡見学園女子大学マネジメント学部紀要、査読無、第14号、2012、159-173
- ⑫ 米山正樹、財務報告基準への展望、会計、査読無、第181巻第1号、2012、46-59
- ⑬ 米山正樹、会計基準と金融規制、金融危機と会計規制(大日方隆編著)、査読無、第9章、2012、297-315
- ⑭ 奥村雅史、利益の履歴情報と市場の反応—利益訂正による分析—、産研シリーズ、査読無、第47号、2012、33-47
- ⑮ 山下奨、負債の測定と損益計算—経営者の期待によるモデルの構築に向けて—、跡見学園女子大学マネジメント学部紀要、査読無、第13号、2012、133-148
- ⑯ 早稲田会計研究センター(代表辻山栄子)、国際シンポジウム: IFRSアドプションの展望—US、カナダ、そして世界の実情、季刊・企業と法創造、査読無、第8巻2号(通巻第30号)、2012、5-42
- ⑰ 辻山栄子、資本と利益、企業会計の基礎概念(体系現代会計学第1巻)、査読無、第1章、2011、25-69
- ⑱ 米山正樹、配分と評価、企業会計の基礎概念(体系現代会計学第1巻)、査読無、第7章、2011、285-334
- ⑲ 辻山栄子、IFRS導入をめぐる最新動向と今後の展望、月刊・監査役、査読無、582巻、2011、4-16
- ⑳ Yuri Biondi, Jonathan Glover, Karim Jamal (Chair and principal co-author), James A. Ohlson, Stephen H. Penman, Shyam Sunder (invited principal co-author), and Eiko Tsujiyama “Some Conceptual Tensions in Financial Reporting,” *Accounting Horizons*, Peer-reviewed, 2012, 26(1), 125-133 (DOI: 10.2308/acch-50087)
- ㉑ Yuri Biondi (principle author), Robert J. Bloomfield, Jonathan C. Glover, Karim Jamal, James A. Ohlson, Stephen H. Penman, Eiko Tsujiyama, and T. Jeffrey Wilks, A Perspective on the Joint IASB/FASB Exposure Draft on Accounting for Leases, *Accounting Horizons*, Peer-reviewed, 2011, Vol. 25, No. 4 pp. 861-871 (DOI:10.2308/acch-50048)
- ㉒ American Accounting Association’s Financial Accounting Standards Committee (AAA FASC): James A. Ohlson, Stephen H. Penman, Yuri Biondi, Robert J. Bloomfield, Jonathan C. Glover, Karim Jamal, and Eiko Tsujiyama, “Accounting for Revenues: A Framework for Standard

- Setting,” *Accounting Horizons*, Peer-reviewed, 2011, Vol. 25, No. 3 pp. 577-592. (DOI: 10. 2308/acch-50027)
- ② 辻山栄子、会計基準の国際化と会計基準のメタ・ルール、*会計、査読無*、第179巻第1号、2011、52-67
- ③ 米山正樹、公正価値測定の理論的基礎—Nissim and Penman[2008]を中心として—、*産業経理、査読無*、第70巻第4号、2011、73-82
- ④ 辻山栄子、IFRSをめぐる6つの誤解、*企業会計、査読無*、第62巻第12号、2010、4-13
- ⑤ 辻山栄子、会計におけるパラダイムシフトの再検討—資産、負債、収益、費用の認識測定を中心に、*証券アナリストジャーナル、査読無*、第48巻第5号、2010、6-16
- ⑥ 辻山栄子、収益認識をめぐる実現・稼得過程の現代的意義、*会計、査読無*、第177巻第4号、2010、1-20
- ⑦ 米山正樹、SFAS第157号にもとづく公正価値情報の価値関連性、*会計、査読無*、第178巻第5号、2010、14-27
- ⑧ 米山正樹、理論研究の将来(3) —先行研究例の紹介と本プロジェクトの独自性および特色(第1章第4節)7-9:先行研究の整理と研究の貢献(第1章第5節)9-14:分類方針(第2章第2節)26-27:分類上の問題とその解決(第2章第4節)30-35:分類の趣旨と分類基準の概略(第3章第1節)37-41(万代勝信氏との共著):規範的・記述的研究の特徴とその変化(第3章第4節)45-46:科学性に着目した分類の必要性—「規範的・記述的研究」を対象として—(第4章第1節)50-53:問題設定の科学性に着目した分類基準—基本分類としての「W型」と「H型」—(第4章第2節)53-55:仮説の進化などに着目した細分類基準(第4章第3節)56-63:理論が満たすべき要件(第4章第4節)63-75:論文査読制度と研究者養成プログラム—規範的・記述的研究—(第8章第1節)143-153:「科学性」に着目した文献分類の含意—(第8章第5節)179-186、日本の財務会計研究の棚卸し—国際的な研究動向の変化の中で—(日本会計研究学会課題研究委員会最終報告書)、*査読無*、2010
- ⑨ 米山正樹、会計基準の整合性をめぐる諸問題—整合性を図る対象をめぐって—、*会計・監査ジャーナル、査読無*、第22巻第4号、2010、105-112

[学会発表] (計6件)

- ① Eiko Tsujiyama, Globalization of Accounting Standards (Accounting Strategies, Accounting Projects: What's New? What's the Future? Workshop), Paris EUROPLACE International Financial Forum

in Tokyo (Imperial Hotel Tokyo) December 2012

- ② 米山正樹、会計理論の質、日本会計研究学会第60回関東部会統一論題報告、2012、12月
- ③ Eiko Tsujiyama, Globalization of Accounting Standards: The Japanese Experience, Panel session —How to do accounting standard-setting all around the world: Global, national, transnational?, AAA, August 2012
- ④ 米山正樹、財務報告基準への展望、日本会計研究学会第70回全国大会統一論台報告、2011、9月
- ⑤ 山下奨、企業結合における識別可能資産負債の測定、日本会計研究学会第69回大会自由論台報告、2010、9月
- ⑥ 辻山栄子、会計基準の国際化と会計基準のメタ・ルール、日本会計研究学会第69回大会統一論題報告、2010、8月

[図書] (計3件)

- ① 辻山栄子、他、科研費課題22330140 成果報告書、国際財務報告基準(IFRSs)の理論的分析、2012
- ② 米山正樹、東京大学金融教育研究センター(CARF)ワーキング・ペーパー・シリーズ(CARF-J-091)、「書かれた」会計基準とその運用—ASBJのIASBに対するコメント・レターの分析—、2012
- ③ 辻山栄子、山下奨、IFRSの財務諸表(証券アナリスト第2次レベル通信テキスト、コーポレート・ファイナンスと企業分析第5回、証券アナリスト協会、2011)

[その他]

ホームページ(早稲田会計研究センター)
<http://w-arc.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻山 栄子 (TSUJIYAMA EIKO)
早稲田大学・商学学術院・教授
研究者番号: 50114020

(2) 研究分担者

米山 正樹 (YONEYAMA MASAKI)
東京大学・経済学研究科・教授
研究者番号: 00276049

奥村 雅史 (OKUMURA MASASHI)
早稲田大学・商学学術院・教授
研究者番号: 30247241

(3) 連携研究者

山下 奨 (YAMASHITA SHO)
跡見学園女子大学・マネジメント学部・助教
研究者番号: 40508446